



Title	総合討議：観光創造学と観光創造研究会のあり方について
Citation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 「観光創造学を考える」研究会録. 2013年11月23日, 24日. 北海道大学遠友学会., 146-164
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56561
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	proceedings
File Information	11discussion.pdf



[Instructions for use](#)

◆総合討議

観光創造学と観光創造研究会のあり方について

西山

それでは、総合討論に入りたいと思います。まず、全体に対するコメントや、あるいは観光創造研究会へのご提案などをお聞きしたいと思います。杓谷先生、お願いできますでしょうか？

杓谷

参加させていただいて、ありがとうございます。実は今週、たまたま勤めている大学が推薦入試のため1週間ほど講義がありませんでした。そこで、来年お世話になりますと西山先生にご挨拶に伺ったら、たまたまこの土日に研究会があるというお話で、ひょうたんから駒のように参加させていただくことになりました。先ほど小林先生から、予定調和でない偶然の面白さというお話がありましたが、まさにそれを一番享受したのは私かもしれません。

私はもともと、国立民族学博物館の大学院で学んでおまして、民博の共同研究会の最後の方に参加させていただいておりました。あの時代は、石森先生は観光文明学とおっしゃっていたのですが、北海道で観光創造という言葉が使われるようになった。実は、その意図するところに対して半信半疑という気持ちもあったのですが、今回参加させていただいて、その思いが晴れたように思えます。観光は平和を前提として成り立つといわれてきましたが、観光によってすべての人を幸せにするという考え方があり、それは非常に進んだ考え方だということを感じます。石森ワールドといいますか、それを受けての、今回発表された皆さんそれぞれの立場からの心意気のようなものを感じる発表でした。本当に参考になりました。

そして、今日の清水先生、西川先生、山田先生のご発表では、普段使っていない頭を使う機

会になりました。本当にインスパイアされました。私はもともと古代遺跡の公園化とその観光という分野を研究しておりますので、特に「時間」という観点については、非常に感じるものがありました。まさにこういうことも含めて議論する会こそ、観光創造学をつくり上げる過程になっているんだと。そのような意味で非常に刺激的な会でした。

西山

どうもありがとうございます。次年度からどうぞよろしく願いいたします。

それでは、今回「ご意見番」としてご参加いただきました、真板先生、小林英俊先生、小林天心先生にそれぞれコメントを頂きたいと思います。

真板

石森先生が退官されるときに、西山先生も交えて話し合いをしていました。文化遺産をどう継承するのかという話題になった際に、私たちは次の世代や22世紀にどんな世界遺産を創れるのかということが課題だと西山先生がおっしゃった。そうでないなら、変な話ですが、私たちは常に遺跡を追いかけているということになるわけですね。新しい価値を創っていくということが観光創造の課題なんだと言われて、私は目から鱗が落ちました。石森先生のおっしゃっている観光創造というのはこういうことなのかと、開眼したわけです。

いろいろな所でお話をするのですが、明治の半ばに市町村制度が出来た時に、全国には約7万1千くらいの市町村がありました。その町村には、今日皆さん方からのお話にもありましたように、人と自然の関わりの中でさまざまな文

化の継承がありました。外国人が当時の日本に
来た時に、日本は本当に黄金の国だと言うよう
な。人と自然の関わりが、時間と空間の区切り
なく継承された世界だったわけです。それが今
や、市町村の数は1,700となり、市町村の統廃
合の中でそういうものが失われているだろうと
思います。

そんな中でまさに観光立国が叫ばれたわけ
です。日本をいったいどのように再生させるのか
という大きな課題があると私は思っています。
どのような遺産を残せるのかという視点でお話
しすると、私は1つの危機感をもっています。
それは、山村先生の研究にも関係することで、
決して批判ではないのですが聞いていただきたい
んです。だんだん社会が閉塞的になっていく
中で、市民社会に大きな変化が起こっている
ということがあります。言葉として表現すると、
「趣味縁とリアル化」という問題です。この趣
味縁というのは、趣味で人々がつながるとい
うことです。趣味がなくなれば、また別につな
がっていく中で、自分のもっている趣味縁をつ
なげてリアル化を確認するのですが、嫌になっ
たらすぐに止めてグループやサークルをすっ
と抜けてしまう。その過程で起こっているのは
何かというと、価値の持続性がなくなって、
極めて短命化しているんです。もし、市町村
が1,700になった中で埋もれてしまった価値
を発掘して、観光手段と考えるならば、趣味
縁とリアル化の社会で、せっかく日本人が何
千年という歴史の中でつくってきた価値とい
うものが、短命なものとして消費化されて
しまう。結局、次から次へと捨てられてい
って、もしかしたら観光が日本を潰すこと
につながる可能性があるのではないかという
危機感すらもっています。

そういう視点で今日のお話をずっと聞いて
いたのですが、今回刺激になった4つのキー
ワードがあったかと思えます。1つは、ツー
リズムにおける「価値」とはいったい何なの
かということです。たとえば単なる遺跡・遺
産を見せる

ことなのか。何人かの先生のご発表の中
で、価値についての問題が出ていましたが、
ツーリズムにおける価値というのを22世
紀に向けて何だと捉えるのかと。何をもち
て観光の価値とするのかが、1つの大き
な課題かと思いました。

2つ目は、その価値をどうやって持続
的に継承するかという問題があるかと思
います。「持続性」ですね。先ほど申し上
げた趣味縁とリアル化の世界の中で、地
域というものを舞台として、日本の歴史
を舞台にして、あるいは今を生きても
いる人たちの創造価値の中から生まれ
た、いわゆるコンテンツというものが、
一過性に終わることなく、未来に向
けて継承されていくための持続的な
仕組みづくりとは何なのか。これを考
えないことには、観光も単なる一種
のイベントやお祭りに終わってしまう
のではないかという問題があります。

それから3つ目は、生み出された観
光価値の役割とはいったい何なのか。
これはやはり山村先生のお話の中にも
ありました、海外との交流ですが、それ
によって何が紹介され、どうい
う交流が起こり、そこに新しい平和
や楽しみが生まれてくるのか。たと
えば、日本なのか、ある地域なのか、
日本人なのか、あるいはそうでは
なくて……といういくつかのレベ
ルがあるはずです。それぞれの役割
というものをどう考えていくのか。

4つ目は、今申し上げたようなことを
未来に向けて繋げていく仕組みとい
うものを、21世紀ではなく22世紀
タイプとして考えていくこと
です。現在の社会の中において、
価値を形成してきた要素が激減
しているのだとしたら、それに
代わるものを私たちが独自に形
成できないか、おそらく持続性
は担保できないと思います。
持続性を含めた仕組みづくり
をベースにものを考えていく
必要があるのではないかな
と思っています。

こうした内容を踏まえると、今後の1
つの研究テーマとして、これからの
観光における価値

とは何かという問題があります。これを私たちは真剣に捉えて論じていくというのが必要だと思えます。今日のお話の中では、事象的なものもあれば、時間の流れや使い方そのもの自身を観光の価値の中で論じるという、比較的抽象的なものもありましたし、あるいは有形／無形の問題もあったと思えます。それらを真剣に捉えて、観光地における観光価値とは何なのかを、どこかで整理して論議したいと思えます。

2 目目は、その価値をどのように持続して継承するかという仕組みづくりの問題です。この中には、いろいろな考え方、やり方、宗教性の問題、いろいろとあると思うのですが、仕組みというは必ずしも形あるものだけではありません。理念や、あるいは人びとに喜びを与える思想などもあるかと思えます。今日のご発表では、お二方の先生が価値論の問題をお話してくださいました。あのお話を聞くだけで私は地域の中に対するイメージが湧いてくる。もっと地域の人に伝えられるという意識が湧くわけですが、そういうエネルギーを湧かせることができると思いますので、そういう意味での持続・継承の仕組みというのを、ハード／ソフトでつくって考えるということは、今後のテーマではあると思えました。

西山

ありがとうございます。観光の価値、そして持続性、それから果たす役割、仕組みづくりというキーワードを頂きました。では続いて、小林英俊先生、お願いいたします。

小林（英）

観光とは何か、いろいろな言い方があると思いますが、1 つの答えとして「観光とは時代を映す鏡だ」と思っています。観光の研究をしていると、社会のあり方、家族のあり方、働き方、いろいろなものが見えてきます。観光は時代を映す鏡であるとするならば、我々がやることは、今

をどう読むか、あるいはこれからの世の中をどう読むかということです。今回の先生方の発表を聞いていると、1 つの時代の曲がり角の中で、観光をどう位置づけてどう考えるかということが、ずっと意識の底辺にあるのだなという印象を受けました。石森先生が問題提起してくださいましたが、我々が今生きている時代は、文化が経済を引っ張っていく時代になっています。経済が文化を引っ張るのではない時代にもう変わっています。観光を文化活動とすれば、観光が経済を引っ張れるんだという、強い認識と覚悟をもたなければいけないというのが、今回皆さんのお話を聞いていて思ったことです。今の文脈でいえば、観光が人と地域を良くできるというのは、文化が人と地域を引っ張っていくとすれば当然のことなんだと思っています。

では、観光創造とは何か。ご存じのとおり、観光業という言葉は産業分類表にないんですね。なぜないのかといえば、今の分類表では分けられないからだと考えています。我々がやっていることは、今の分類表で分けられるものを融合させること。単なる足し算ではなく、掛け合わせる、融合されることで新しい価値を生んでいるのが観光だから、分類できないのだと、大学の講義では学生に話をしています。とするならば、これも石森先生が言われたように、観光とは融合させて新しい価値を生むことなんだと考えられます。観光創造という言葉はすごくいい言葉だと思っていて、新しく創り出すことに意味があるというメッセージをもっています。観光を創り出すのではなく、観光を使って新しい価値を創り出すことに意味があると思うわけです。それぞれが「世の為人の為」にどう役に立つのかという観点から価値を創り出したときに初めて、我々の役割というのがわかってくるのだらうと思っていて、この 2 日間のご発表を聞いておりました。

先ほどの真板先生の話にもつながりますが、持続性や、地域を元気にするとは何かと考えた

際に、1つのことをずっと守るのではなくて、常に新しいことを創り出す仕組みや人がいることが肝心なのだと思います。そうした仕組みや人を地域に根づかせるということが、私たち観光創造を実践する者の仕事であろうと。結果としては、地域に蓄積された知恵やヒントを、やる気のある人たちが1つの集団としていく仕組みを創ることなのではないかなと思います。そうすると、新しいアイデアが生まれてくる。そのレベルまで持っていければ、我々が地域に入り込んで観光創造をやっているんだと、自信をもって言えるんだと思います。

もう1つ、今日の午前中のお話を聞いていて勉強になったことがあります。私たちは、楽しい、元気、豊かなどの言葉をお互いにわかった上でやり過ぎしてしまうことがあります。しかし、時間とは何か、楽しいとは何か、元気とは何か、生きるとは何か。当たり前の言葉の先々を考えると議論をすることで、それは本質的に何なのかわかってくると思います。「地域が豊かになることが私たちの目的ですよ」「そうだよ」で終わってしまっていて、豊かという概念がそれぞれに違っていけば何も生まれません。常に「それって何？」と概念を問い直していく。そこから新しい何かが生まれてくるのかと思っています。

共同研究の意味は、自分たちのもっている知見をぶつけ合うことで、気づきや新しいことが生まれてくることです。そういう意味では、こうした研究会は必須という気がしました。今回、立ち上げから参加できたことは、すごくありがたいことだと思いますので、ぜひ皆さんと一緒にこれを続けていければと思っています。

西山

ありがとうございます。真板先生からは価値、持続性、仕組み、人、そして、時間や豊かさというお話がありました。小林先生からは、それ自体を問い直していかなければいけないという

こと、それを議論する意味というものをお話いただきました。

それでは、小林天心先生お願いいたします。

小林(天)

7年前、石森先生から観光産業の戦略論をやってほしいと拜命を受けまして、7年間観光創造専攻で講義を受け持たせていただきました。確か最初の頃の研究会で、宮下先生がキティちゃんの話をしていました。そういう切り口からの観光へのアプローチがあるのかと驚いたことがありましたが、それから7年経ち、昨日今日とお話を伺っている中で、観光創造の進化・深化を感じました。北大の観光創造のステータス、実績はすごいんだと改めて感じた次第です。2日間、本当に勉強になりました。

結論をまず言うと、皆さんのお話を伺って、観光は本当に何でも横断してしまえるんだと感じました。まさに融通無碍です。それだけに、いったい観光学の核になるものは何か。いつも言うとおりに、玉ねぎの皮をむいたら何にもなくなってしまう、では少し寂しいですね。昨日も少しお話ししたように、私は観光学の一般原理とは何かをずっと考えて、大学院生にも投げかけているところです。

さて、もう観光立国と言い出して10年経ちました。今までの旧態依然の考えが残っている観光立国ではなく、まったく新しい観光立国論を我々で考える必要があるのではないかと、先ほど遠藤先生と話をしておりました。交流、歴史、文化というお話が、昨日今日と出てきていますが、やはり基本になる石森先生が仰っていた「世の為人の為」という大志。Lofty Ambitionとおっしゃいますけど、それをベースに幅広くかつ具体的な話をしていかなければいけないと思っています。

今日の先生方の発表は、相当に頭を回転させないと付いていけないもので、かなり強烈に考えさせられるところがありました。たとえば西

川先生のお話を聞いていて、頭に浮かんだのがスマートフォンを持った猿です。24時間スマホに使い回されているような、バーチャルとリアルを混同して、時間と空間をまったく無視したような若い人たちのあり方というものがあると思います。自分についていけない議論があるのだなと改めて感じました。

それから、私の観光産業戦略論という講義の中で大学院生に話していることがあります。お金になるから、日本というものを輸出できるからと、インバウンドが叫ばれますが、インバウンドとセットになるアウトバウンドも、同時進行的に考えていかなければならないということです。その中で、振り返ってみると1996年の旅行業法の改正というものが、実は今のツーリズムの有り様、特にアウトバウンドの有り様に、ネガティブな影響を与えている気がします。小林英俊先生から、意味をそぎ落とすかたちの観光というお話が何回も出てきました。旅行業法には3つの原則がありまして、1つは旅程管理です。いかに予定した旅行の行程を正確に実施していくかという問題です。それから2番目に、旅程保証というものがあります。これは約束したホテルを使わなかったら、1軒につき旅行費用の1%を返金しなければいけない、約束した飛行機が変わったら2%返金しなければいけないというもの。実に馬鹿らしい、世界では類を見ない旅行業法の規定が出来ました。3番目は保険制度です。旅行業者の責任がある／ないに関わらず、事故が起きた時にはこのくらい払わなければいけないという制度です。現在の旅行業界を縛っている、これら旅行業法のあり方の原点は不逞旅行業者の取締りです。観光の文化的側面をまったく無視して、いかにマス・ツーリズムを安全安心に運行するか。安全安心というのが唯一の念仏のようになっています。1996年に新しい旅行業法が施行された時に、海外旅行をする人は1,800万人でした。それまでは毎年倍々ゲームのようでしたが、急ブレーキがか

かりました。この15年間で、1,600万人くらいまでに下がってしまったんです。これはなぜかという、旅行業法の不逞業者取締りという観点が前に出すぎて、旅行業全体の手足を縛ってしまったからです。つまり新しいことに対するチャレンジや、質的な旅行の意味をまったくそぎ落とした段階で、安全安心を100%約束したものを渡せばいいという旅行会社だらけになってしまったんです。大中小すべての旅行業者のプランナーは何をやったか。クレームがつくのが怖いので、安全パイだけを握ろうとしました。つまり、大都市周遊型の商品、大規模ホテルの利用、そしてビーチリゾート滞在型の商品といったようなところに落とし込まれてしまった。そして各社の旅行の日程の作り方を見ても、去年やったとおり、一昨年やったとおり、あるいは売れ筋だけ、というようなところに集中していきました。新聞広告を見ておられる方はわかりだと思いますが、10年、15年、20年前とほとんど同じような商品しか出てきていません。結果的に、質的な変化がなければ価格競争に走るしかないんです。だから、29,800円で北海道3泊4日というようなツアーがどんどん出てきて、朝5時に起きて7時にはバスに乗って、夜の5時や6時まで引っ張りまわされて1日500km走る。そして、行った・見た・帰った・くたびれた、もう行かないということになる。日本国内のマス・ツーリズムもそうですが、外国旅行においてさらに同じパターンが繰り返されています。その最たるものが、阪急交通社のトラピックスであり、JTBの旅物語であり、H.I.SのChao!などに代表されるようなメガ・ブランドです。小林英俊先生がもっとも嫌う部分の商品造成ですね。それが現状のマス・ツーリズムのヘゲモニーをつくっています。ですから、私がこの観光創造のテーマの1つに掲げていただきたいのは、マス・ツーリズムの研究です。マス・ツーリズムと言った途端に嫌な顔をされることも多いです。しかし、観光立国や産業論な

ど、経済的な側面からツーリズムのあり方を分析するということでは、現状のマス・ツーリズムをどう質的に進化させていくかという点が重要です。それを迂回していったのでは、ツーリズムの進化はありえないと思います。いろいろな現象をいろいろなかたちで捉えて、あるいはいろいろな切り口でツーリズムを捉えていただくのは結構ですが、全員に押さえていただきたいのは、いかにマス・ツーリズムを進化させるかということです。

そして、私は前から鎖国 DNA という言い方を、いろいろなところでしています。日本人の今の価値観やものの考え方、特に外国との付き合いという場面では、この DNA が顕著に表れます。1640年の鎖国成立から、実質的には1964年の海外渡航自由化までのほぼ330年間は、一般の大衆にとっては実質的な鎖国状態にありました。これが、日本人特有の精神構造を際立たせたかたちで作ってきたと思います。この鎖国 DNA をどうするのか、非常に気になっているところです。現在、ツーリズムの総需要の限界があり、それを補うほどインバウンドが伸びないという理由で、日本の旅館・ホテル、特に旅館が赤字経営を余儀なくされています。ほとんどが先が見えないというところまで追い込まれているわけですが、ほぼ5割に近い旅館の経営者が、外国人のお客は要らないと言うわけです。これはありえないことなのではと思うわけですが、もういやという諦めがあるんです。無理やり新しいビジネスを獲得に行くこと、つまり外国人のわけのわからない、面倒くさい人たちを相手にするよりも、もうこのまま旅館を閉めた方がいいと思っている人が5割いるということです。これは実に驚くべきことではないでしょうか。これも鎖国 DNA の1つの側面だと思うのですが、鎖国が残した遺伝子へのチャレンジという課題は、国際交流の側面からすると、大きなテーマとして残っているのではないかと思います。

以上の2点が、特に申し上げておきたいことです。さて、今日の山田先生のお話を面白いなと思いながら伺っていました。その後で、小林英俊先生から人類学的なフォローアップのお話がありました。それを聞きながら、頭に浮かんだ本のタイトルがあります。この中で、ジーン・アウルというアメリカ人の女性が書いた『始原への旅たち』という本をお読みになった方はいらっしゃいますか。実に面白い本です。時代背景は、ネアンデルタール人からクロマニヨン人へ移行する中で、エイラという女性が当時のユーラシア大陸をベースに、だんだん大人になっていくプロセスを描いた作品です。ビルドゥングス・ロマンというか、非常に面白いストーリーです。旅をしながら火の使い方に習熟し、弓矢の技術を身に付け、動物たちを家畜化するということをしながら、彼女はだんだん大人になっていく。まさに始原への旅立ちというおりですが、この本を読みながらツーリズムをもう一度、オリジナルなところまで返ってレビューすることがとても面白いと思います。

そして最後に、「一本の指の痛みを全身で感じられる」という山田先生のお話を聞きながら思ったことです。どこかで私が読んだ本で、今の日本の風潮は「今だけ・金だけ・自分だけ」ということになっていると書かれていました。このままだと日本は滅びるという言い方で、それはそうだろうなと思っています。研究会の冒頭で石森先生が話された Lofty Ambition というところに帰っていくんですけども、こうしたループの中で、ツーリズムがだんだんと新しい役割を果たせるようになれば、とてもいいなと思いました。観光創造への新しいこれからの10年に向けて、ぜひ頑張ってくださいたいし、及ばずながら若干でもお手伝いをさせていただけるフィールドがあれば嬉しいと思います。

ともあれ、7年間のこうした機会を与え下さった石森先生に御礼を申し上げますとともに、皆さまにもありがとうございましたと申し上げ

て、私のコメントとしたいと思います。

西山

ありがとうございます。1 つ目のご指摘がマスの研究。マス・ツーリズムをいかに深化させるかということこそ、我々が取り組むべきではないかというご指摘がありました。それから、鎖国 DNA へのチャレンジ。私も先ほど言いかけてましたが、観光立国の目的や将来像とは何かを考えた時、インバウンドで外国人観光客を呼ぶ、あるいは地域の観光事業者の意識を高めることが大事だとよくいわれます。しかし、アウトバウンド、もっと海外に旅行すべきだという政策がない限り、観光立国は成り立たない。はじめからインバウンドばかりになっていて、本当の観光立国の半分しか考えていないという危機感は私ももっています。それから、石森先生がおっしゃる「世の為、人の為」。こうした大きな方向性を、この研究会としても常に見失わないようにというご示唆を頂きました。

それではここからは、すべての共同研究員によるフリー・ディスカッションを行ないたいと思います。今後の研究会の進め方や、こういうテーマにもっと着目してやるべきではないかなど、自由なご意見を頂きます。真板先生や石森先生などからお話しいただいた、価値や仕組みづくりという大きなテーマもあります。また、もう少し具体的に、次回からどのような研究会を展開するかということもお話しいただきたい。ちなみに、申し上げましたように、できれば年度内にもう一度この研究会を開催したいと思います。今回は第 0 回ですが、第 1 回は私の責任でテーマを決めなければならないと思っております。しかし次年度以降は、共同研究員の先生方が、こういうテーマでやりたいと手を挙げていただいて、内部だけではなく外部からも人を呼んでいただく。コメントを頂く研究員の方も、学内外からお呼びして展開したいと考えております。皆さまの「こんなテーマでやりたい」と

いう自分のことでも結構ですし、他の方のことでも結構ですし、自由にディスカッションできればと思います。

また、この研究会で言い残したことがあるという内容でも大丈夫です。少しは私が申し上げたことについてもコメントを頂きたいのですが、どうぞ自由にご発言ください。

西川

私はちょっと視点を変えてお話しします。観光創造専攻ではただいまカリキュラムの見直しを進めています。演習科目を価値共創、地域協働、国際貢献という 3 つのグループに分けようというものです。先ほどから議論いただいていることは、我々の研究だけではなくて、教育にも直接還元できるものであろうと考えております。ひいては、観光創造士という、次の世代に我々の理念・考え方を受け継いでいくようなシステムの構築・構想にも関わってくるのかと考えています。

西山

観光創造士に関しては、先ほど白井先生から、高いフェイズで話せる人ではなくて、免許証のような基礎的な知識の証明でもよいのではというお話がありました。一方で小林天心先生からは、実際に世の中の観光を良くしていくためには、マス・ツーリズムを正面からいい方向に向けていかなければいけないというお話がありました。このお話と、観光創造士の基礎的な能力の話は、実は関わってくるように思えます。

白井

もう 1 つ、私なりにずっとこの観光という舞台に関わった中で、取り上げなくてはいけないなと思っていることがあります。今のマス・ツーリズムのお話にも関わりますが、キーワードでいえば「アーバン・ツーリズム」です。私は来年の 4 月から、小規模住宅が重なる地域で

暮らし始めるわけですが、そうした都市にはやはり人がたくさんいます。また、都市住民は都市住民として、ツーリズムの範疇に入らないかもしれませんが、どうやって楽しんで生きていくかと日々苦勞しているわけです。私自身も、地域というキーワードを大切にしてきましたが、都会の人たちが都会の中でどう暮らしていくのかという観点があります。遠くに行くツーリズムだけでなく、都会の中で楽しむツーリズムという部分は、今まではあまり意識されてきませんでした。山田先生の研究分野と重なる部分もあるのかもしれませんが、真正面からその問題を捉えないと、これだけ都市住民が多い日本の中でツーリズムを語れないのではないかと思います。

西山

観光創造士、あるいは今展開しつつある話題で、ご意見のある方はいますか。

山田

西山先生の体系化の議論についてです。昨日、山村先生がコメントされましたが、上の3つは現象分析ではないかということでした。私には、下の3つは設計、上の3つは企画、そういった社会の仕組みづくりを目指しての研究に見えるんです。非常に重要なのは、これらの背後にある現象、現在の社会がどうなっているのかという、社会現象についての分析です。今回の発表では、石森先生が1860年の第1次観光革命から観光が社会現象としてどういう経緯をたどってきたかということをお話しされました。西川先生からも、近代が始まり現代に至るまで、私たちの世界の見方がどう変わってきたのかというお話がありました。私も少しだけですが、戦後日本のことについてお話しさせていただきました。当然、マス・ツーリズムが盛んであった近代と今では社会情勢がまったく違って、人びとの価値観が異なる。その中で新しい価値

を生み出そうとしたときに、今求められている、あるいは将来に必要な価値とは何なのか。価値の意味が変わってきているということ、やはりもう少し確認する必要があるのではないかと思います。

近代においては、共同幻想としての国民国家や科学技術が人々の間でリアリティをもっており、政治にしてもある種の共通前提が共有されていたといわれます。しかし、近代も後半になると、近代的理念のリアリティも薄れてきます。たとえば、歌はかつて世相を反映していましたが、今や紅白歌合戦にしても家族みんなが観て楽しめる番組ではなくなった。近代的な価値が相対化されて、価値観が多様化しているのが現代です。伝統的な価値がだんだん失われているという、先ほどの真板先生のご指摘はその通りだと思いますが、それではこれをどうやって後世へと継承していくのか。これは、観光創造研究にとって非常に大きなテーマだと思います。たとえば趣味縁のお話がありましたが、趣味縁でつながる若い人たちが、その関係を長く続けることはおそらくありません。その一方で、彼らは複数の趣味縁に所属して、時と場合で関係を使い分けるといった生き方をしているわけですね。そういう友達関係を、今の若い人たちは重視して生きています。こうした時代の変化の中で、価値の共有も近代とは異なる形を取らざるを得ないかもしれません。価値とはそもそも何なのか、価値を継承するとはどういうことなのかについて、根本的なところで問い直すことが重要になると考えています。

敷田

方法論のお話が少し出ましたので、連想してお話しさせていただきたいと思います。古典的な社会科学の方法論だと思いますが、方法論は無限にあるわけではなく、ある程度限られています。それに賛同される先生方は多いと思います。山田先生がおっしゃった、社会を説明する

ような分野というのは、おそらく実証的な社会科学 positive social science でしょう。経済学などが得意とする、データに基づいて現象を説明していくことだと思います。観光の分野では、このデータを取れる範囲が限定され、データですべてのパターンを一般化することが非常に難しいので、おそらくモデルを作るということが、観光分野では旬な仕事になっていくと思います。

一方で、今日の午前中の発表に多かったように、意味を説明するという解釈的な社会科学があります。数量的な説明ではなく、解釈を指向するものです。このように、2つの方向性は違うのですが、3つ目のアプローチもあります。批判的な社会科学 critical social science といえいいのでしょうか。これは批判するだけではなく、社会的課題を解決することを目指す社会科学でもあります。このような、実証的、解釈的、批判的という3つの社会科学のアプローチは、おそらく観光研究の分野でも成立するのではないかと考えています。ただ、これが観光創造学の体系化と直接にはつながらないという問題はありますが、整理の一助にはなると思います。

続いて、少し別の見方を紹介します。私はたまたまこの2年くらいの間で、お医者さんとお付き合いが深くなってきました。その時に一番よく考えてきたのは、医療のシステムと観光のシステムは相似形であるということです。よく考えてみますと、医療サービスと観光サービス、患者と観光客という関係には非常に類似性があります。たとえば、私たちは医療サービスを病院に受けに行きそれを消費して帰ってきます。もちろん、違いもあります。観光サービスの場合は必ず戻ってきますけど、医療サービスは戻ってこないかもしれません(笑)。もう1つは、医療では身体を扱うのですが、観光では身体や皮膚の外、つまり考え方や行為を主に扱うという差があります。こうした差はありますが、医療と観光は非常に似ているので、観光創造学の

体系化の議論で、先行している医療の体系化を参照する必要があるのではないかと考えています。

観光創造学、観光創造というものを突き詰めていくと、もう1つ生じてくる問題があります。観光創造のことを一生懸命に議論しているときに別の見方を提起するのは、多少申し訳ないところもありますが、お話しさせていただきます。医療の例で考えますと、「医療創造」といった場合に、皆さんは「創造的な」医療をサービスとして受けたいですか？私はNOだと思います。私たちが受けたいのは primary care といって、一次医療、つまり町医者が出発点に行なう医療サービスです。これは、小林天心先生が先ほどおっしゃったマス・ツーリズムにかなり近いものです。それが基本的なニーズであると思います。ただし、それで解決できない医療のケースもあるので、2次、3次……と、国際的なレベルの医療を受ける選択肢もあるだろうと思えます。では、我々はどのレベルの観光創造を提案していくのか、それを誰に対して提供していくのかということを確認しないと、おそらく観光創造学の体系化が出来たとしても、それを受けたい、見たい、体験したい、学びたいという人に対しての説明が不十分になる可能性があると考えています。この点を整理するのはいかがでしょうか。

関連した内容を申し上げますと、医療というのは、本来は自分の持ち物である身体に他者の介入を許すことです。自分で自分のお腹を切るとは医療法で禁止されていますが、他者には切らせることができるという不思議な仕組みで、観光も同じように他者への関与を正当化していく1つの手段という性質があります。人の所へ勝手に入って行って許されるのは観光だからであり、ひとつ間違えれば犯罪になりかねないことも、観光だからといってかなり大目に見てもらっている。これは医療行為も同じで「医療行為だからこれは食べてはいけない」とお節介を

働くことができる社会の仕組みだと思えます。このあたりのことも考えていかなければいけないと考えています。もちろん、こうした特性は医療行為だけではなく、たとえば格闘技、戦闘などの類似行為はあると思えます。しかし、きわめて私たちの身近にあって考える参考になるのは医療の問題ではないでしょうか。

つきましては、次の研究会をどうしたいのか。出来るとしたら、お医者さんに来ていただいて、医療の歴史と最新動向について基調講演していただいた後で、観光の議論をすると、ダイナミックな議論ができるのではないかという無謀な提案をさせていただきます（笑）。

池ノ上

体系化の話に関連させて話します。小分類に位置づけられている「ライフスタイル・イノベーション研究」は、むしろ全体にかかわる研究ではないでしょうか。「ライフスタイル・イノベーション」に含まれるであろう、社会の仕組みや人びとの生き方は、観光まちづくりではむしろ観光研究における大前提であると思えます。同じ並びになっている「地域イノベーション研究」では、このような前提に基づいて、地域はどのようにイノベーションをするのか、まちづくりをしていくのかということを考えます。

山田先生からは、現象を捉えるという基礎的な観光創造研究というお話がありましたが、私の言いたい前提というのはこれに近い考え方かもしれません。つまり、大分類の「観光イノベーション研究」と「観光デザイン研究」とは別に、前提としての「ライフスタイル・イノベーション研究」があるのかなと思えます。

もう1つはデザインという言葉の使い方についてです。私は、九州芸術工科大学で学んでおりました。そもそも九州芸工大は梅棹忠夫先生が設立メンバーに入って、1960年代になって出来た新しい大学です。もうすでになくなってしまったのですが。その九州芸工大では art と

technology とを融合した言葉を design として表現していました。art と technology の語源はもともと一緒だといわれますが、もう一度この2つを一緒に考えようと。人の考え方や理念を表現する art と、近代において工業や大量生産のシステムに結びつく概念である technology を、人を中心に捉えることで学問としてもつなぎあわせようという試みです。そう考えると、デザインは単なる技術やシステムではなくて、理念や論理を前提にしなければいけないのではないのでしょうか。西山先生の体系化試案では、理念、論理や世の中の現象などを前提にする構造にはなっていないので、そういうカテゴリーを一番上に1つ作るのがいいのではないかと思います。

山村

私も池ノ上先生と似たようなことを考えていました。小林英俊先生が、体系化試案の上の部分（「観光イノベーション研究」）と下の部分（「観光デザイン研究」）をつなぐ何かが必要ではないか、とおっしゃいました。これがずっと私の頭の中に引っかかっていた。私は、上は現象を分析する分野で、下はデザイン・応用分野ではないかと考えていました。しかし、先ほどからの各先生のご発言を踏まえると、上は理論や現象を分析していく部分で、下はそれを地域に應用するコンサルティング的な部分になるのかなと思えます。そして、両方をつなぐもの、基礎になければいけないものは、「人間」という分野ではないかと思いました。今日の先生方のご発表の中で、いくつか関連するキーワードが出てきました。宗教、道徳、理念、倫理、思想、神、死、巡礼、聖なるもの、他者との関係性…つまり、人間にとって観光とは何かという議論が、非常に重要だと改めて気づかされたわけです。振り返ってみると、これまでの観光学がなぜ良くなかったのかといえば、人間不在の観光学だったからではないかと思えます。それに対して、我々はあくまでも人間中心の観光創造

学を作るべきではないのかと強く感じました。今後目指すべき方向としては、関連分野、あるいは一見関連しないような分野を統合していく中で、その接点を見いだすことを通して、人間にとって観光とはどんな意味をもつのかということをしつかりと考えることではないでしょうか。こうした考察をコアに置いた上で、現象を分析し、かつそれを応用的に確認するというアプローチを取るべきではないかと。間をつなぐというよりは、池ノ上先生がおっしゃるようにベースとなる部分であるのかもしれない。

それからもう1点お話しします。先ほど真板先生と山田先生から、価値に関するご提言がありました。これは私も非常に重要なことだと思います。価値について我々がアプローチすべき方法には2つあります。1つは、我々自身が研究を通して目指すべき価値というものを先駆けて掲げていくというものです。もう1つは、実際に現場で起きていることを価値づけるというものです。事実は小説より奇なりと申しますが、今の現場で新しく生まれてくる価値が、我々の学問分野では想定しえなかったところで、1つの答えを出しているのかもしれない。そういうものを丁寧に価値づけていく、つまり我々が説明をしていくという作業が必要になるのかなと思っています。

たとえば先ほどの趣味縁の問題があります。趣味縁の儂さ、持続性のなさという特徴は確かにあると思います。しかし現場を見ていると、趣味縁の儂さにすでに気づいている若者たちがいます。こうした人たちが、具体的な場所や地域につながりはじめています。小規模ながら、そこに新しい動きが生まれている例があるわけです。それを我々なりの評価をしていくことで、何らかの新しい形が見えてくるのではないかと。そして、昨日小林天心先生から問題提起いただきました、ポピュラー・カルチャーとトラディショナル・カルチャーの関係性の問題。趣味縁の中から新しい文化が生まれてくるかもしれま

せんが、それを今後の文化遺産にしていくためには、どういうプロセスと仕組みが必要なのか。その際に重要なのは、人そのものと、文化を育てていくインキュベーターとしての場所です。これらが実は、ツーリズム研究に課せられた重要な課題になると思います。

そして創造性に関して、創造都市論でよく提起されることとして、創造性を担保するためには多様性が必要であるという考えがあります。cultural diversity がそもそも必要であり、そしてそれを受け入れる寛容性が大事である。このあたりも重要な論点になってくると思います。先ほど小林天心先生からも鎖国 DNA というお話がありましたが、とりわけ日本では社会の閉鎖性といいますが、自分たちの中に閉じこもるという性格が強いと私も思っています。その中で、コミュニティの閉鎖性を打破する仕組みとしてのツーリズムというものを考えていく必要があるのではないのでしょうか。そもそも bio-diversity の観点では、たとえばサルの集団では、若いオスザルはコミュニティを追い出されてよそに行くわけですね。それが遺伝的な多様性を担保するために、自然に生み出されている仕組みであり、そのアナロジーとして cultural diversity というものを、いかにツーリズムを通して認められるようにするか、そこから creativity を生んでいくのかという創造論も重要かと思っています。

西山

ありがとうございます。この分類表は叩き台に過ぎないので、よりよい形にしていければと思います。ぜひともお考えいただきたいのは、これが「研究」の体系化であるという点です。基礎研究が必要だからといって、「基礎研究」とこの表に盛り込むのか否か。たとえば大分類の「観光デザイン研究」はまさに実践そのものであるように見えながらも、それは単なるコンサルティング的な仕事ではありません。つまり、

ここで研究をしなくてははいけません。実践は研究の手段であるともいえます。もちろん社会の要請を受けての実践という意味では、実践には違いありませんが、ただ言われてやるなら、コンサルタントに頼めばよいということになります。研究として何をやるのかということ、くれぐれもお考えいただきたいのです。排他性、つまり研究の次元や具体的なフィールドの次元で、それぞれ行なうべきことが重ならないかが重要です。「人間とは何か」を考える基礎研究、またはマス・ツーリズムの研究を試案に盛り込むと、どんどん柱ばかりが増えてしまいます。増やしていく方向よりも、より排他性を確保しつつ、どこでどのような研究を行なっているかがわかる。具体的に何の研究をするのかということと連動していきながら、ぜひこれを組み替えて、体系化にチャレンジしていただきたいと思います。

池ノ上

そういう意味では、大分類に「観光創造論研究」のような言葉が入るかもしれません。皆さんでもう少し議論しないといけないかもしれませんが、小分類に入っている「ライフスタイル・イノベーション研究」のようなものは、そこにプラスされるとして分類表に入ってもいいのではないかと思います。

イノベーション研究そのものは、ツーリズム産業イノベーションと、地域イノベーションに区分できるかと思います。この2つは現象を見ているというよりは、むしろどのようにイノベーションを起こすかという戦略を考える研究ではないかと。

西川

考え方は多様な方がいいと思い、あえて申し上げます。池ノ上先生がおっしゃった、それぞれの領域の「理念」の部分については、それらの領域の中に含み込められていることを、我々

自身が前提としてもいいのかなという気もします。西山先生のお作りいただいた表の土台になっているのは、自律的観光の枠組みということだったと伺っています。そう考えると、観光創造学が総花的になってはまずいのだろうと思います。私も観光という現象はまったく多様であると思うのですが、ある意味での Lofty Ambition をもちつつ、総花的にならずに我々の軸足をどこかに据えてやっていくというような合意が、ある程度できればいいのかなと思います。

さて、少し細かくなりますが、西山先生の表では小分類の一番上のところで、カッコ付きで「都市民の」レクリエーション研究とありますが、なぜ都市民なのかという疑問があります。

西山

きちんと説明しきれていなかったのかもしれませんが。カッコの内は、かつての研究分野の名称です。たとえば、都市民の余暇レクリエーション研究というのは1960年代からずっとありましたが、今はこれを研究とするという言い方すらない。いまやライフスタイル・イノベーションという研究に発展してきているという意味で、イコールという意味ではまったくありません。同じように、地域イノベーションがまちづくり研究だという意味ではないです。

小林（英）

西川先生のご意見に賛成です。基本は人間研究をしなればいけないという池ノ上先生のご指摘はその通りです。しかしそれは、観光創造を研究する者にとって共通の話ではないでしょうか。石森先生が観光創造という名称を付けられたのは、何々を創造しようという意味、つまり観光そのものをどう使うかという意味だと理解しています。人間研究と言ってしまうと、すべての分野に関わりが生じます。ですが、ここで西山先生が考えられたのは、「何々を創造する」

ということを見えるようにしようということだと理解しています。ですから、基礎として人間とはそもそも何かという話を研究しなければいけないとなると、話題がどんどん拡散してしまいますので、こうした形の方がわかりやすいかと思います。

さて、現象を分析するというのは非常に重要ですが、今の観光研究の多くは現象の分析で終わっていることが多いですね。我々としては、現象の分析で終わってしまうような分析はやめた方がいいと思います。問題発見、問題解決が創造につながるのであって、レビューをして、表にして綺麗に見せることはできても、創造というところにはなかなか至らないだろうと思います。我々が観光創造学でやろうとすることは、問題解決なんだという方向性を、共通認識としてもっていた方がいい。研究していくものの意味が出てくるのではないかなと思います。つまり、最後はこれをもって観光の何々を創造しようとしているのだというストーリーの中で現象を分析するのはいいのですが、現象分析を専門にしてはいけないという意味です。

山田

小林英俊先生はあえておっしゃってくださったと思うのですが、現象分析とは、単にデータをとって検証するだけのものではありません。今に起こっていることを、正しくその時代の社会的文脈の中に位置づけるという試みです。重要なのはその視点であり、その中で新しい何かが発見されていくということなのではないかと思います。

この話に関連させますと、小林英俊先生がサスティナビリティのプロセスをご説明くださいましたが、私もその通りだと思います。現代では、新しい消費化の流れが生まれていますし、山村先生はそうした分野を研究されています。昨日のご発表では、どんなコンテンツが日本のサブカルチャーの中で重要なのか、あるいはど

んなコンテンツが国際的に評価されているのかというお話もありました。私は、現在のコンテンツをめぐる現象を、よりダイナミックにとらえる必要があると考えています。どういうことかということ、コンテンツ自体よりも、コンテンツをめぐるn次創作、つまりコンテンツをみんなで共有して作り変えていくという活動、すなわちコンテンツをネタにしたコミュニケーションが盛んになってきています。国際的評価として受容されているのは、まさにこの新たなコミュニケーションの仕組みです。コンテンツをめぐるn次創作、コミュニケーション自体に、世界の若者たちが興味をもって参入してきているという実態があります。やはりこういった新しく出現した現象を、より深く掘り下げていくことが必要で、たとえばこの考察から価値の持続性についての新たなコンセプトが生まれてくるのではないかと思います。

西山

少し話を戻して申し訳ないのですが、そもそもなぜ観光創造学を体系化するのかというお話をします。昨日、建築学と観光学に関する科研費の表をお見せしました。建築学の場合は、建築学会の中の構成をそのまま表しているんですね。ですから、もし観光創造学会というものを作って、それぞれの専門分野をもつ人が一定程度の役割分担をしていきながらその学を構成していくと考えた時に……という現実的なことを念頭に置いてこれを作りました。これは整理上の体系ではなく、あらゆる観光研究者が排他性と横断性の双方をもちながら、どの区分からも溢れない枠組みをつくれないう意味で作ったということもご理解ください。

私は、科研費における観光研究の分野が情けないのです。情けないというのは、つかみどころがなく、今の時代の観光分野で使われているキーワードがただ並べられているだけに見えるのです。「あなたたちはまだ全然体系化されて

いないから、どこの芽が出るかわからないけど頑張ってるね」と言われているように見えるんです(笑)。1つのものの見方として、何度も申し上げるとおり叩き台として出したものなので、ぜひ対案を出していただいて議論したいと思います。その時に初めて、どのような理由のもとで体系化に関する基本的なシステムを構想しているのかについて議論していくことが大事かなと思います。その意味では、敷田先生が医学のお話をさせていただいたのは非常に大事なことです。そういういろいろなものを参照しないと行けないと思います。私は建築学にしましたが、それは偏った見方かもしれません。また、この研究会だけではなく、もう少し日常的に学内でも議論していきたいと思いますので、よろしくご協力いただければと思います。

今後の研究会のキーワードとしては、観光の価値の問題、継続する仕組みの問題、人を育てる問題、マス・ツーリズム、アーバン・ツーリズム……こういうものが出てきていますが、他に提案のある先生はいらっしゃいますか。昨日今日と、非常に議論の盛り上がったコンテンツ・ツーリズムについてもテーマになりうると思いますが、山村先生や鎗水さんいかがでしょう？

山村

機会があればぜひ次年度、コンテンツ・ツーリズムで研究会を出来ればと思います。そもそも、昨日もご意見がありましたが、コンテンツ・ツーリズムという呼び方は、我々が発信する概念として適切なのかどうか。もっと本質的な意味を捉えた上での体系化が出来れば、それが一番いいのではと思っています。

先ほど山田先生からご指摘がありましたが、我々が今後扱っていくべきは、今回の研究会で出てきた言葉でいえば、新しい価値の創造と継承、ストーリーの共有などです。コンテンツを共有することで、人びとにどんなコミュニケー

ションや交流が成立しうるのか、そこをフォーカスしていくべきではないかと思います。今の時代においては、インターネットなどを用いた2次創作、3次創作が早いスピードで広まるようになっていきます。しかしツーリズムの本質は、文化資源や地域のもつストーリーをいかに共有して大事にしていけるのか、今までつながらなかった人たちがつながっていきけるのか、ということではないかと思っています。昨日の言葉でいうと pop cultural なツーリズムをスタート地点にしながらも、たとえばヘリテージ・ツーリズムと共有できる部分はないのか。私の頭の中では1つの筋が通っているように感じるのですが、まだ上手く説明できずにいます。そういった意味での汎用性をもった、普遍的な議論に進化させる機会を頂ければなと思っています。具体的には、今いろいろな分野で、コンテンツ・ツーリズムと称する研究を始めている方々を呼んで、この場で意見を拝聴し、理解を深めていければと思います。

鎗水

コンテンツ・ツーリズムについてということでお振りいただきましたが、これまでのお話を伺っていて、コンテンツ・ツーリズムとは関係のないところで、今は純粹に学生という立場で参加しているのは私だけになりので、ちょっと学生の立場からコメントさせていただきます。

観光創造学の体系化というお話を伺っていて、大変おもしろい、興味深いお話だったのですが、博士課程の学生としてどう自分の立ち位置を見つければいいのか、なかなか難しいところだと思いました。既存の観光学がちゃんと体系化されているのかはよく分かりませんが、その中に今から立ち入っていかなければいけないのは学生の立場にいる人間です。今から「博士(観光学)」という学位を取得したとして、そこからこの学問の世界でどう身を立てていけばいいのか。観光創造学というものと今までの観光学の間に

ひずみ・ねじれがあり、ある意味では一番それを体感する立ち位置にいるというか、その最前線にいるのが、この博士課程の学生なのではないでしょうかという気がしています。この学院で学ぶ学生として期待もあると同時に不安もあるというか、いったいどうすればいいのかなというところですか(笑)。大変勝手な意見を思い浮かべて聞いていたのですが、現実的な問題としてそういったところも考えながらやっていければと思います。

西山

まことにその通りで、鎗水さんが納得できる議論をしていかねばならないわけですね。ただ、観光創造専攻を立ち上げるときに、石森先生が趣旨に書かれた一節があります。そもそも観光創造学というディシプリンはない、あらゆる分野の学問を総動員して……と。先ほど池ノ上先生がお話しになった九州芸術工科大学の環境設計学科でも、同じようなことを言っていたんです。募集要項に、「建築学でも農学でもない、環境設計学というものを作るのはあなたです」という書き方をしているわけです。学生がその中で新たな環境設計士というものを確立するという言葉は、非常に格好いいのですが、それを背負わされた学生はなかなか大変という面もあります。まだ観光創造専攻は始まって10年経っていないという中で、鎗水さんが不安になるのも仕方がないし、鎗水さんも待っていては間に合わないということとは思いますが、逆に言うと、そういう創造期に参画できているということを面白いと思ってもらいたいです。ただし、我々でも将来無くなってしまうことのないようにしなければいけません(笑)。まさに持続性をどう担保するか。創造的な研究を行なう中で結果的に持続するということを、私たちが議論していかななくてはいけないと思います。

西川

かつて少しだけカルチュラル・スタディーズを研究したことがあります。カルチュラル・スタディーズでもまったく同じような議論がありました。ある研究者は彼らにディシプリンが出来てはいけないんだと言います。つまり、既存の学問体系に見られるような囲い込みや、既得権益づくりにチャレンジするのが、カルチュラル・スタディーズのそもそもの意義であるというふうに彼らは考えています。観光創造というものも、おそらく似たような要素を含んでいると思います。だからこそ、観光にとっての価値は何なのか、価値を創りだしていく、我々が見いだしていくという議論の場にいることこそが、観光創造の意義なのかもしれません。昨日今日とこのような場にいることに、私自身も興奮していますし、観光ルネッサンスという意気込みを新たにいたしました。私は観光創造専攻の入試説明会などの場で、「とにかくここで何か起こっているということだけは確信をもっている」と繰り返し言っています。逃げるわけはありませんが、ぜひそういう意識をもっていたきたい。学生の皆さんも、不安な気持ちと闘いつつ、その不安を私たちと共有しつつ、協働関係を大切にしていければと思っています。

麻生

私は世界遺産や文化財、景観の研究をしてきました。白川村にずっと関わっていますが、文化遺産の限界、閉塞感のようなものを感じることがあります。

山村先生は中国雲南省の麗江の研究をされていて、そこから更に発展してコンテンツ・ツーリズムを進めていらっしゃると思います。今回の山村先生のお話を伺っていて考えたのは、文化遺産を資源とした観光は、人びとは文化遺産、つまり「本物」がある地域を訪れて観光します。それに対し、コンテンツ・ツーリズムは世界どこでも価値を共有できる自由度があるように

思えます。そのような簡単なことではないかもしれませんが、コンテンツのもつこうした可能性と、今の私がもっている閉塞感に関係性があるのか気になります。こうしたテーマも研究会で議論をできればいいのなと思いました。

山村

今の麻生先生のご指摘は重要で、私も常々考えていることです。私は、価値のコアは場所や地域がもつ「本物」であるということは共通していると思います。ヘリテージ・ツーリズムとコンテンツ・ツーリズムの違いは、その入口とアプローチの仕方です。これは私の解釈ですが、ヘリテージ・ツーリズムは昔のものを見に行く、そして究極的には今そこに生きている人びとを理解するというベクトルにあります。入口は昔にあって、それをいかに今に引っ張ってくるかということですね。コンテンツ・ツーリズムは逆です。今流行しているものを入口にしながら、どうやってその地域に結び付けて、その地域がもっている一番大事なもので引っ張っていいのか。その大事なもののゲートとアクセスのチャンネル、つまり、どこからどうやって引っ張っていくのかという手法の問題に集約されると思っています。実は、その議論はコンテンツ・ツーリズムでもできるのではないかと。具体的には、Outstanding Universal Valueなどの価値へのアクセスの問題、価値へアクセスするためのメディアの問題、そしてそこにどのようなコンテンツや情報が乗るかという問題。私が常々考えていたのは、ヘリテージとは古いものですよね。リビング・ヘリテージではない場合ですが、古ければ古いほど今を生きている私たちとの間にギャップがあって、なかなか自分のこととして理解をしづらと思うんです。それをどうやって自分のこととして共感させられるのか、その仕組みをずっと麗江で考えていました。今はまったく逆のベクトルではあるのですが、昔からのアプローチと今からのアプローチの接点

を考えたいという思いがありましたので、ぜひ次年度の機会があればと思います。

西山

ありがとうございます。時間も迫ってまいりましたので、まとめていきたいと思います。いろいろなキーワードを頂きましたし、今の山村先生と麻生先生のやり取りの中からも、今回の研究会の1つのあり方を示唆していただけたと思います。

ちなみに私は、年度末に第1回目の研究会をやるとすれば、発表者がどういう方になるのかは別として、コミュニティ・ベースド・ツーリズムがテーマかと考えています。コミュニティというものは私たちみんなに共通するテーマであり、これをキーワードに出来ないかと思っております。またいろいろ先生方にご相談したいと思っています。

最後に、石森先生にコメントを頂きたいと思っています。

石森

皆さん本当にありがとうございました。皆さんのお話を伺いながら、昔のことをついつい思い出してしまいました。2005年9月15日に、北大の言語文化部長、企画部長と東京オフィスの所長の3名が民博に来られて、北大に大学院を創りたいので協力してもらいたいというお話を受けました。その背後では清水先生が精力的に情報収集役を務めておられたので、清水先生は大学院の生みの親のようなところがあります。それで、10月上旬にこちらに参りまして、当時の中村総長や副学長や事務局長、今いらっしゃる宮下先生、山田先生、西川先生、清水先生ともお会いしました。そして、いろいろな段取りが出来て、CATSを創設させていただきました。

今でも覚えていることがあります。2006年4月1日に着任する前、2006年3月25日に文部科学省に呼び出されました。その時から北大と

して大学院の創設準備をしていたのですが、専攻名称は観光学専攻でした。私は観光創造専攻を提唱していたのですが、当時実際に準備を進めておられた幹部の先生方はあくまでも観光学専攻が妥当であろうと判断しておられました。そんな中で私はまだ北大の教員ではありませんでしたが、何度も文科省との事前協議に同席しました。文科省の担当官は観光学専攻の大学院構想案に対して、「これで北大は本当にいいのですか？」と何度もおっしゃった。文科省は北大に対して高い期待をもってくれていました。旧帝大の一つが観光学を制度化しようとすることを評価してくれていたわけです。しかしその段階では名称は観光学専攻であり、これでは立教大学の大学院と同じではないかというわけです。「観光立国政策が本格化する中で、北大として本当にそのような構想案でいいのですか」と、2時間半にわたってかなり厳しく問題点の指摘がありました。私は担当官の厳しい指摘を聞きながら、おっしゃるとおりだと思っていましたが、私の横には北大の幹部の先生方にいたので、なんともいえない立場でした。そのときに宿題ともいえるたくさん問題点を指摘され、事前協議を終えて、別室に戻ったときに幹部の先生方は「書類提出までに3ヶ月しかないけれども、大丈夫ですか？」と言われました。その年の6月末に設置審議会へ書類を出さないといけないためです。そこで私は「だからこそ私が北大の専任教授として招かれるので、今後は私に任せてください」と言い切りました。

2006年4月に北大観光学高等研究センター長に就任してから、まずはじめに専攻名称は観光創造専攻にすべきであると主張しました。そうすると、例の幹部の先生方は「日本観光創造学会はありますか？」と質問してきました。要するに、観光創造学会もないのに、大学の専攻として認められるわけがないと強く主張されました。それはまあそうだろう、だけど現実になんもないものはない(笑)。されど、現代日本において

一番必要なのは観光創造であり、それを担う人材を育てることこそが大切であると主張しました。

さまざまな議論の末に、危険な賭けではあるけれども専攻名称を「観光創造専攻」にして書類を完成させて6月末に提出しました。8月末くらいに設置審議会の事前審査結果が届きました。幸いにもほぼ100点満点の評価でした。そして早くも9月20日に認可が下りました。これも極めて異例な早さでした。

このように、観光創造専攻は非常に大きな期待を受けて創設された大学院です。最初はよちよち歩きでしたが、今日ここに、これだけのメンバーが集まって、高度なレベルの議論がなされているのは本当に素晴らしいことです。

ただ、いまだに観光学に対して強い偏見があります。山村先生は、コンテンツ・ツーリズム研究を推進しておられますが、いろいろな誤解を受けていると思います。いま小樽ではロリカワ観光が盛んになっています。私自身にとっても、すぐに理解が可能ではありませんが、いずれにしても観光をめぐる世界は大きく変わりつつあります。

山田先生は、巨大な転換の時代が到来していると指摘されました。ポスト虚構の時代、拡張現実の時代であり、社会は様々なカタチで大きなうねりを受け、転換点を迎えています。その中で、今後、観光をいかなるカタチで発展させていくのかという課題が重要になります。

小林英俊先生のご指摘にもありましたように、観光業は日本標準産業分類の大分類にはありません。産業として大分類されていないということは、国家の産業政策において不利なことです。実はこの点は日本の観光立国政策において根幹に関わる問題です。だからこそ、白井先生が指摘されている「触媒としての観光」という視点が重要になります。北大における観光創造研究も、触媒の役割を果たして新たな価値を生み出す必要があります。

西川先生や清水先生などからご指摘がありましたが、新しい自己との出会いという面も大切です。私は昨日、「開発（かいほつ）」「発光」という話をしましたが、一人の個人として考えた時に、観光を通して人間が変わるといことがありえます。

国のレベルでは、観光立国という課題があります。私は2003年に観光立国懇談会のメンバーの一人として首相官邸に呼ばれて、観光立国の理念を起草しました。当時の小泉純一郎首相は観光立国懇談会の提言を受けて、2003年7月の国会における施政方針演説の中で観光立国宣言を行いました。それから10年が経ちました。私はいま、日本はもはや「観光立国」ではなく、「観光創造立国」こそを推進すべきであると提唱し始めています。

北大の観光創造専攻が生み出すものには多重的な意義があります。ただし、私はすでにセンター長を西山先生にバトンタッチしたので、とやかく言える立場にはありませんが、年長者として感じることもあります。今後のCATSと大学院観光創造専攻は、一方でアカデミックな業績を積み重ねていくはずですが、この点は今回の皆さんの議論の中で明らかになっています。もうすでに多くの学術的成果が生みだされていますし、今後もしろいろな成果が北大の観光創造研究グループから出てくると確信しています。

しかし、もう1つの重要な方向性があります。それは社会貢献、地域貢献、産学連携などです。今後このような方向性をいかに進めていくか、という点も重要になります。中国の大学においても観光学が展開されはじめています、清水先生がお話してくださいました。ただそれが欧米風の観光学であって、中国なればこそその観光学ではなさそうだということでした。現在、アジアの中で観光学分野でのナンバーワンは香港理工大学です。欧米の大学でホスピタリティ・マネジメント、ツーリズム・マネジメントやホテル・マネジメントなどで博士号を取得

した教授陣が頑張っておられる。そこでの観光学研究・教育は、アジアの大学でありながら、ほとんど欧米流のようです。

そういう状況の中で、北大の観光創造学は、アカデミックな面はもちろんのこと、アカデミックな成果をいかに社会貢献や地域貢献や産学連携などの面でも役立てていくかという課題に取り組んでいく必要があります。「世の為、人の為」などということをおあまり軽々に言わない方がいいのですが、私はいつも観光創造学が「世の為、人の為」の学問になりうるか、ということをお自問自答し続けています。

私はこれまでに数多くの新しいコンセプトを提起してきました。例えば、観光革命、文明の磁力、観光ビッグバン、自律的観光、宗教と観光のホモロジー、ライフスタイル・ツーリズムなど、少々大仰な提起の仕方をしてきました。その理由は、日本における観光があまりにも軽んじられ、蔑視され続けていることに対するアンチテーゼのような意図で提起してきました。北大の観光創造学についても、日本の保守的な学界の中で頑張らないといけなくて、アカデミックな面で業績を積み重ねると共に、社会貢献、地域貢献、産学連携などの面でも頑張らないといけません。

今回の西山先生の体系化の試案の中でも、観光イノベーション研究と観光デザイン研究が分けられています。観光デザイン研究の方が実践的と捉えられますが、この点については、文科省や観光庁はとくに今年度になって、北大の提唱している観光創造士制度について高い関心をもって来ています。ここにおられる先生方にも、ぜひとも北大として文科省と観光庁の期待にどう応えるかということをお考えていただきたい。観光創造学について、アカデミックな面とノン・アカデミックな面の両面で、北大としての特色を打ち出していく必要があります。

と主張することは簡単ですが、実現していくことは簡単ではありません。アカデミックな面

で観光創造学という新しい学問領域を確立していくことは容易ではありません。同様に、実践面についても、西山先生は九州大の頃から教えておられ、麻生先生の先ほどのお話の中にも実践の問題がありました。実践に力を入れていると、時として心が折れることがあります。現実というのは甘くないので、実践の裏付けとしてアカデミックな理論づけをしながら、されど地域の人々と協創していくことが大切になります。

観光創造学という新しい旗印を掲げて頑張ることは重要ですが、若い研究者や院生たちが観光創造学を研究することによって人生が成り立つようにしていけないといけないので、大学等でのポストが必要になりますし、研究資金も必要になります。

いろいろな困難を抱えていますが、これだけ数多くの研究者や院生が観光創造学という新しい学問領域について議論できるのは素晴らしいことであり、私もこの2日間で多くのことを学ばせていただきました。皆さん方のお話に触発されて、また老骨に鞭を打って、1年先輩の小林天心先生とともに頑張っていきたいと思えます。今後ともよろしく願いいたします。

西山

石森先生ありがとうございます。これをもちまして、第0回観光創造研究会をお開きとしたと思います。どうも皆さまありがとうございました。